日常に根ざした公共空間の利活用の実態と地域に与える影響に関する研究
- IKEBUKURO LIVING LOOP を対象として -
A Study on the Actual Utilization of Public Space Rooted in Daily Life and Its Impact on the Local Community
A Case Study of IKEBUKURO LIVING LOOP

原　唯菜
HARA, Yuina

概要：近年、「公共性」と「持続可能性」を両立した公共空間の利活用が求められている。本研究では、地域住民の公共空間活用事業への関与と認識に着目し、地域住民にその空間を利活用する意識や習慣を根付かせることを目指した活動を「日常に根ざした公共空間の利活用」と定義し、その実態を考察するために IKEBUKURO LIVING LOOP を対象にその事業と地域の関わりの実態を明らかにした。まず事業の変遷からは、日常に根ざすには「定期的かつ頻度の高い活用」「関わりしろの広がり」「活用の幅を広げる行政との連携」が重要であることが明らかとなった。地域住民の関わりの実態からは、「関わりの柔軟性」と「役割が先行しない個人としての関わりを持てる環境」が重要であり、地域全体としてのつながりや信頼関係の構築に繋がっていく影響力があることがわかった。

Summary: In recent years, there has been a growing demand for the utilization of public space that is both "public" and "sustainable. This study focuses on the involvement and recognition of local residents in public space utilization projects, and defines "daily-rooted public space utilization" as activities aimed at instilling in local residents the awareness and habit of utilizing public space. In order to examine the actual situation, we clarified the actual relationship between the project and the local community. First, from the transition of the project, it became clear that "regular and frequent use," "expanding the scope of involvement," and "cooperation with the government to broaden the scope of use" are important for the project to take root in daily life. From the actual situation of local residents' involvement, it was found that "flexibility of involvement" and "an environment in which they can be involved as individuals without taking roles ahead of others" are important, and that they have the influence to build ties and trust in the community as a whole.

キーワード: 公共空間・市民参加・場づくり・事業継続性・地域社会・豊島区
Keywords: Public space, Citizen participation, Place making, Business continuity, Local community, Toshima city

1. 研究の背景と目的　近年、公共空間の空間機能に対する需要と認識が拡大し、その活用手法が多様化している。公共空間の活用手法が増え自由度が増す中で、「公共性」と「持続可能性」を両立した公共空間の利活用が求められている。本研究では、地域住民の公共空間活用事業への関与と認識に着目する。公共空間の利活用を、より長期的な地域の賑わい創出に繋げていくためには、活用された状態が地域住民にとって非日常でなく日常の当たり前の風景となることが目指されるべきであり、地域住民が事業やその場の利活用方法への認識を正しく持ち、利活用する意識や習慣を地域に根付かせることが重要である。本研究では、これを公共空間の利活用における「日常性」とし、「継続性・持続性」の先にある目標概念として位置付け、その状態を目指す利活用を「日常に根ざした公共空間の利活用」と定義する。

本研究では、豊島区で行われている IKEBUKURO LIVING LOOP の活動を対象事例とし、(1)８年間の事業全体の活動の変遷の把握から、公共空間の利活用が日常に根ざす過程とその要因を明らかにする。その後、(2)2024 年度の活動に関わる人々の関わりの実態を明らかにし、日常に根ざした公共空間の利活用に関わる地域住民の活動への意識と地域への影響を明らかにする。以上(1)事業と(2)人の関わり方の両方から、日常に根ざした公共空間の利活用の実態と地域への影響を考察することを本研究の目的とする。

2. 研究の位置付け　本研究と関連する先行研究は、①地域の参画に着目した公共空間の継続性・持続性に関する研究[1)2)]の他、②公共空間の日常性に着目した研究[3)]が挙げられる。先行研究を踏まえた上で、「日常性」という視点から事業の変遷を追うことと、そこに参加する個人の関与の実態を同時に明らかにすることから公共空間の利活用の実態を明らかにする点に新規性があると言える。

3. 研究の方法と対象事例　本研究では、はじめに「日常に根ざした公共空間の利活用」の定義付けをした上で、対象事例の活動の実態と地域の関わりについて(1)文献調査と(2)アンケート調査を通して明らかにする。対象と

する事例は、豊島区南池袋・東池袋にあるグリーン大通りと南池袋公園を中心として行われている公共空間活用事業の「IKEBUKURO LIVING LOOP」である(/図 1)。2017 年より「グリーン大通り等における賑わい創出プロジェクト」として、株式会社 nest が豊島区からの委託事業として受ける形で実施し、2020 年からは地元企業と 4 社体制で受けて運営を行なっている。ストリートや公園を居心地よくリビングのように過ごせる「まちなかリビング」と捉え直し、定期的なマーケットの実施やストリートファニチャーの設置実験等、ソフトとハードの両側面から実験と検証を続けている活動である。

4. 活動の変遷と日常性　公共空間の利活用が日常に根ざす過程とその要因を明らかにすることを目的に、活動の変遷を整理する。「日常性」の観点から、特に活動頻度と地域との接点に着目し、それに関わる活動内容や運営主体からのアプローチについて整理する。8 年間の IKEBUKURO LIVING LOOP の活動を契約更新の時期と合わせて第 1 期 (2017 年-2019 年)、第 2 期 (2020 年-2022 年)、第 3 期 (2023 年-2004 年) にわけ、それぞれの時期での活動内容をまとめる(図 2)。

4-1. 活動の変遷の整理

(1) 第 1 期の活動　第 1 期の活動は、月に 1 度のマルシェを中心とし、地域企業・地域店舗・地域住民を巻き込み連携しながら、公共空間の利活用のあり方を試行錯誤の期間であった。マルシェでの企画や空間整備を通して利用者の空間の使い方を観察し、それを次の利活用、もしくはハード整備に繋げる動きが多く見られた。結果として、その後の利活用が促進されるような街路整備の実施と規制緩和が行われた。

表 1：事業概要(資料[4]より筆者作成)

プロジェクト名	IKEBUKURO LIVING LOOP（グリーン大通り等における賑わい創出プロジェクト）
事業開始	2017 年
主催	グリーン大通りエリアマネジメント協議会（GAM）
共催	豊島区
企画運営	株式会社 nest（契約主体）/株式会社グリップセカンド/株式会社サンシャインシティ/株式会社良品計画
協力	南池袋公園をよくする会/STUDIO201/合同会社伊藤維建築設計事務所/としまミュージックサークル実行委員会/東邦レオ株式会社/一般社団法人 Hareza 池袋エリアマネジメント/モクタンカン
連携	周辺企業、池袋エリアプラットフォーム

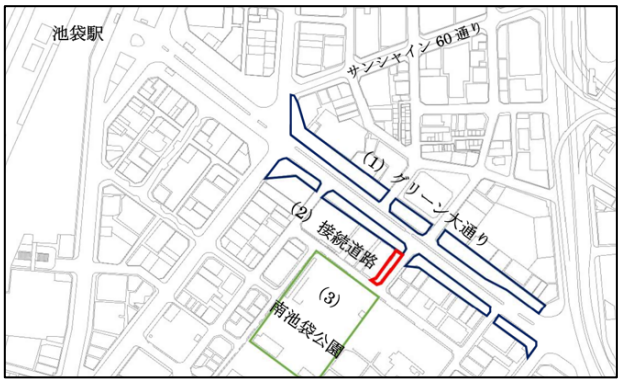


図 1：対象エリア(資料[5]より引用)

(2) 第 2 期の活動　第 2 期からは、より持続的な運営・経済体制となるよう地域企業 3 社と連携し、4 社での共同事業体としての活動がスタートした。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、活動に大きな制限がかかって

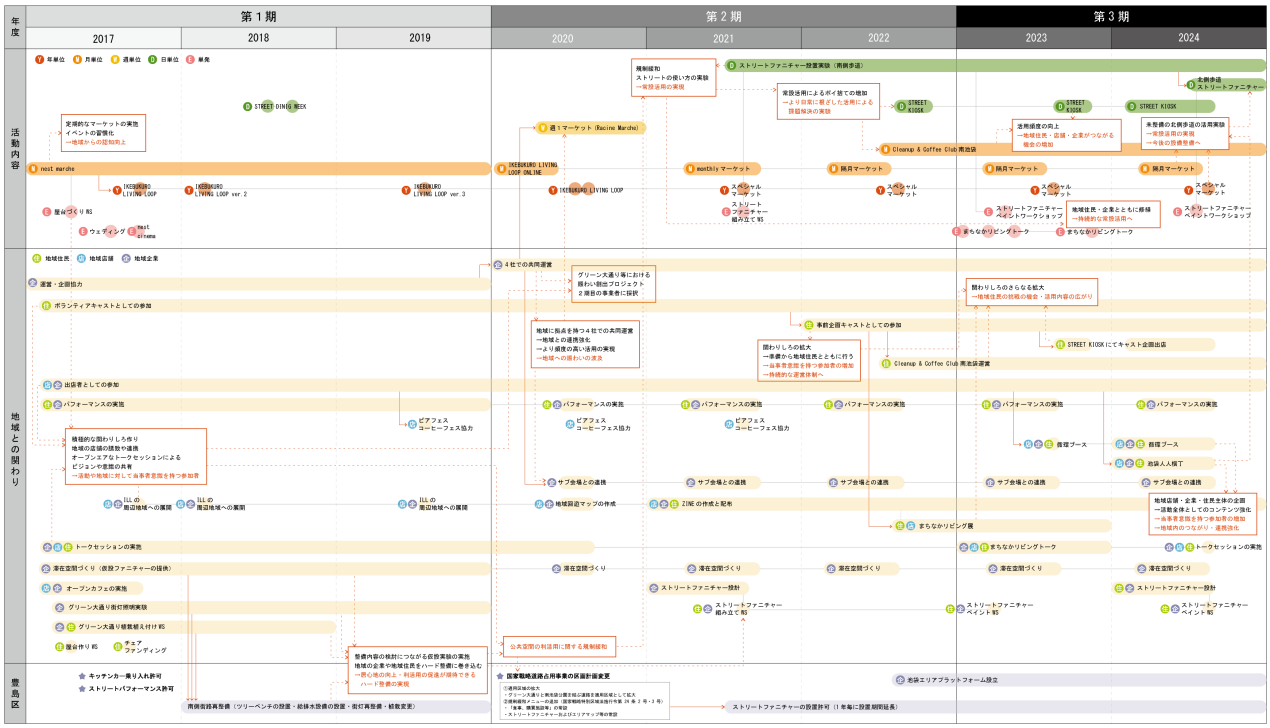


図 2：IKEBUKURO LIVING LOOP の 8 年間の活動の流れ（筆者作成）

しまったが、その中で行われた IKEBUKURO LIVING LOOP online やマーケットの開催を通して地域企業・店舗・住民がその連携を強化していった期間だったといえる。
また、プロジェクト全体としては、コロナ禍を経たことで、改めて日常の価値に焦点が当てられ、2021 年度からは「まちなかリビングのある日常」というコンセプトでより積極的に日常の風景を作り出す方針が立てられた。2021 年度には国家戦略道路占用事業の内容変更で設置が可能になったストリートファニチャーの設置が行われ、2022 年度には月 1 回開催の Cleanup & Coffee Club 南池袋(以下 CCC 南池袋)がスタート、さらには STREET KIOSK の開始など、より頻度高く、日常に根ざした公共空間の利活用が開始された期間であった。

(3) 第 3 期の活動　第３期は第１期･第２期と蓄積してきた活動を継続し、さらに地域と協働していく動きを強めていく期間であった。コンセプトを「ネイバーフッドコミュニティ」とし、活動の中で地域住民・店舗・企業が主体となって行う企画がいくつも実施されていた。また、STREET KIOSK や CCC 南池袋の継続的な開催によって地域の交流の機会が増加し、「地域住民・企業・店舗同士」「地域住民と地域企業」「地域住民と地域店舗」「地域店舗と地域企業」と地域に関わる人々同士のつながりを強化する動きが多く見られた。さらに、マーケットや STREET KIOSK といった活動を舞台に地域住民が発案、もしくは主体となる企画や活動が実施されるようになっていった。

以上より、第３期から地域住民主体や発案の企画や活動が実施されるようになっており、これは地域の人々がグリーン大通りと南池袋公園の利活用方法を理解し、何かできる場所であるという認知が根付いた結果であると考えられる。これより、IKEBUKURO LIVING LOOP は 2024 年度現在、ある程度日常に根ざした公共空間の利活用が実現しているといえると考えられる。

4-2. 日常に根ざした公共空間の利活用につながる動き

4-1 より全体の活用の流れを整理する中で、日常に根ざした公共空間の利活用の実現につながっていると考えられる動きが３つ挙げられた。

(1) 活用頻度の向上と「ハレとケ」の活動の往復

活用の頻度が上がることは、地域住民の目に触れる機会が増え、活動の認知や利用の機会が増えることにつながる。合わせて、出店が日常になることで、新たに関心を持った地域住民が関わりやすい環境が生まれていると考えられる。これまではマーケットだけにとどまっていた地域の縁が日常でもつながるようになり、この「ハレとケ」の往復が地域企業・出店・住民間の連携を強めた要因となっていると考えられる(図 3)。

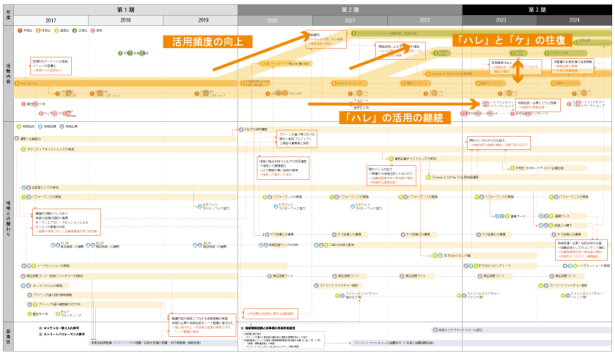


図 3：全体の流れと活用頻度の向上

(2) 関わりしろの拡大　活動の中には地域住民が関わる機会を多様に作られていた。これにより、当事者意識を持つ参加者を増やし、共に企画や運営を行う仲間を増やしていったと考えられる(図 4)。

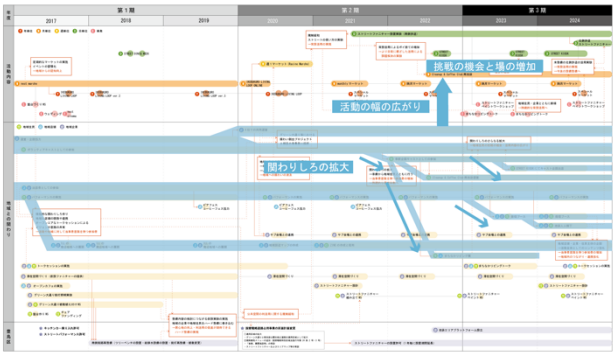


図 4：全体の流れと関わりしろの拡大

(3) 活用の中での利用者の声の可視化と、行政による規制と整備の担保　8 年間の活動と合わせて、活動を通した利用者の声の可視化を行うことで、行政と連携しながら規制緩和や空間整備を通して段階的に活用の幅を広げていった。これが日常性獲得の担保となっていたと考えられる(図 5)。

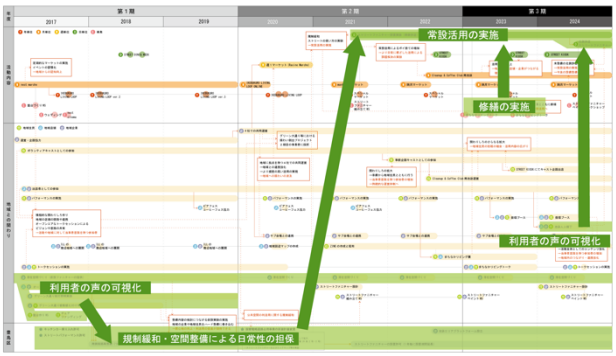


図 5：全体の流れと行政の関わり

以上のプロセスによって段階的に作られた地域内でのつながりや行政との信頼関係が、日常に根ざした長期的な利活用につながるものであると考えられる。

5. 関わりの実態と地域への影響　本章では、活動への人の関わり方から日常に根ざした公共空間活用の実態の把握を行う。2024 年度に IKEBUKURO LIVING LOOP に能動的に関わった者[1]を対象にアンケート調査を行うことで、個人単位での活動への関与の実態を明らかにする。

5-1.　関わり方から見る４つの活動の特徴　まず、2024 年度に行われた活動ごとに関わり方を整理した(表 2)。

表 2：調査した 4 つの活動（筆者作成/画像 nest 提供）

	仮設活用			常設活用
内容	マーケット スペシャルマーケット	STREET KIOSK	Cleanup & Coffee Club 南池袋	ストリートファニチャー 設置実験
頻度	マーケット：隔月開催 スペシャル：年１回	特定の期間中 出店があれば毎日	月１回	常設
場所	グリーン大通り 南池袋公園	グリーン大通りあおぞら銀行 前ストリートファニチャー	グリーン大通り 南池袋公園他	グリーン大通り

結果、活動ごとに関わり方(図 6)は大きく異なっており、動機(表 3)は概ね「人とのつながり」を求めたものが多いものの、活動ごとに違いが見られることが明らかとなった。そこから、それぞれの活動の特徴や役割について考察することができた。年４回開催される「ハレの日」としてのマーケットでは役割ごとに独立した役割や動機がある一方で、「ケの日」の活動としての STREET KIOSK では運営・活用と利用の役割を行き来して参加する人も多く、マーケットでの縁を日常でつなげる役割があることがわかった。また、月 1 回定期的に開催される CCC 南池袋は、地域の交流の場であるとともに新たな人とのつながりを作る場として機能し、地域内の回遊起点としての役割もあることがわかった。最後に、ストリートファニチャー設置実験は他 3 つの活動とは異なり、人との交流を生むという効果は少ないが、不定期で開催されるメンテナンスの活動に「地域貢献」の機会として関わっていることがわかった。

表 3：活動に関わる動機

分類	項目	マーケット(n=88)		STREET KIOSK(n=49)		CCC南池袋(n=41)		ストリートファニチャー(n=49)		総計
		回答数	回答率	回答数	回答率	回答数	回答率	回答数	回答率	
自己実現的	自分の気晴らし・楽しみになる	48	54.5%	29	59.2%	21	51.2%	14	28.6%	112
	趣味が深まる	22	25.0%	9	18.4%	4	9.8%	2	4.1%	37
	新しい知人・友人が見つかる	62	70.5%	22	44.9%	30	73.2%	6	12.2%	120
	友人・知人と会うことができる	53	60.2%	37	75.5%	31	75.6%	12	24.5%	133
	地域の人と交流できる	68	77.3%	37	75.5%	32	78.0%	15	30.6%	152
	地域のことを知ることができる	59	67.0%	22	44.9%	23	56.1%	8	16.3%	112
	新しい知識・技術を習得できる	28	31.8%	8	16.3%	3	7.3%	5	10.2%	44
	自分の技能・経験が活かせる	30	34.1%	12	24.5%	1	2.4%	3	6.1%	46
商業的	売り上げを得る	24	27.3%	6	12.2%					30
	自分の店や商品を知ってもらう	32	36.4%	10	20.4%	3	7.3%	1	2.0%	46
社会貢献的	地元の食材や商品を支援する	17	19.3%	8	16.3%					25
	地域の活性化に寄与する	50	56.8%	25	51.0%	15	36.6%	17	34.7%	107
	地域が安全になる	17	19.3%	16	32.7%	17	41.5%	2	4.1%	52
受動的	友人・知人からの誘い	14	15.9%	5	10.2%	3	7.3%	2	4.1%	24
	参加するようにお願いされた	7	8.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	4.1%	9

5-2.　個人の関わり方から見る関わり方の特徴と地域への影響　次に、個人の関わり方を整理した(表 5)。これらの活動に関わる人々のほぼ全員がマーケットに関わり、その他 STREET KIOSK、CCC 南池袋、ストリートファニチャー設置実験への参加は人それぞれであるという傾向があった。活動への関わり方は三者三様であり、IKEBUKURO LIVING LOOP に関わる人々は複数の活動と複数の役割を往復するような形で関わっていることがわかった。

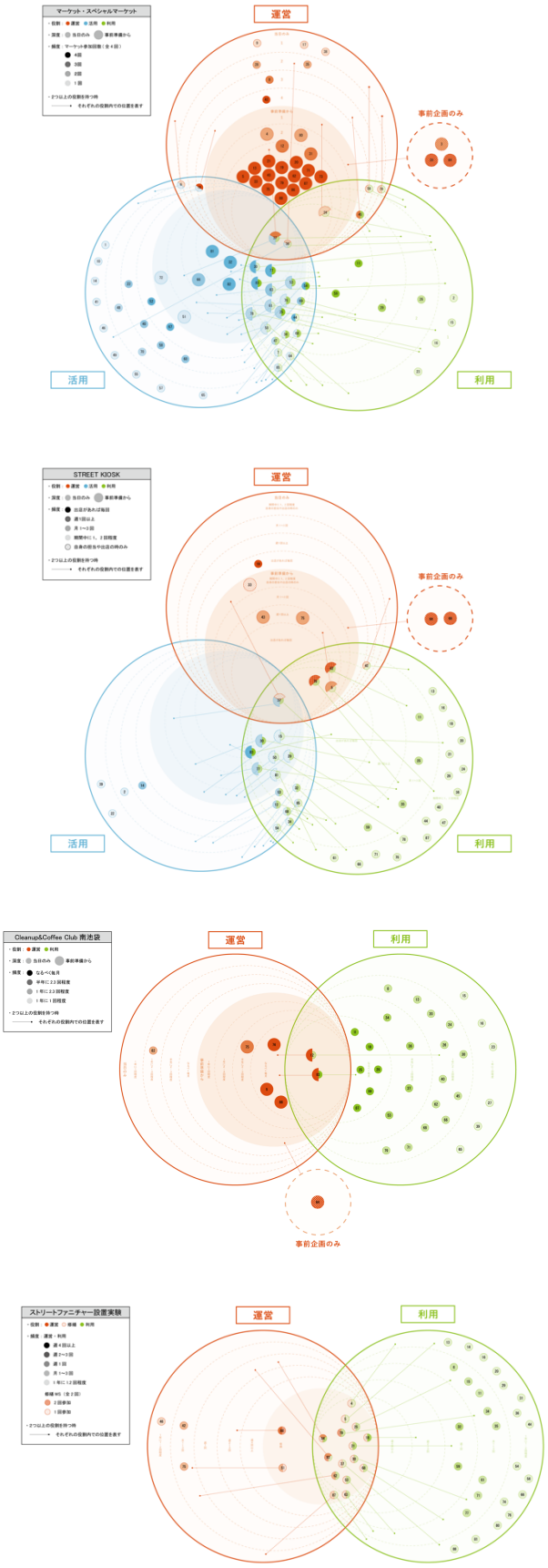


図 6：4 つの活動ごとの関わりの実態

また、関わる活動の数ごとに活動の参加による変化と地域とのつながりのクロス集計を行った結果、より多く活動に関わり、複数の活動と複数の役割を往復する人々は、豊島区民やその近隣の地域住民であることが多く、IKEBUKURO LIVING LOOP の活動に限らず地域を回遊する動きも生まれていることがわかった(表 4)。結果として、地域内でのつながりや信頼関係がより深く形成されている傾向にあった(図 7)。

表 4：関わる活動の数ごとの地域の交流拠点[2]

拠点名	4つ (n=26)		3つ (n=14)		2つ (n=25)		1つ (n=23)	
	人数(人)	回答率	人数(人)	回答率	人数(人)	回答率	人数(人)	回答率
南池袋公園	17	65.4%	7	50.0%	6	24.0%	10	43.5%
サンシャインシティ(共創空間等)	14	53.8%	4	28.6%	5	20.0%	1	4.3%
豊島会議	13	50.0%	6	42.9%	3	12.0%	1	4.3%
P-144	14	53.8%	8	57.1%	8	32.0%	3	13.0%
ひがいけボンド	13	50.0%	4	28.6%	4	16.0%	1	4.3%
滝野川フレイムス	19	73.1%	8	57.1%	4	16.0%	2	8.7%
くすのき荘	18	69.2%	5	35.7%	3	12.0%	3	13.0%
シーナと一平	10	38.5%	5	35.7%	3	12.0%	3	13.0%
ニシイケバレイ	10	38.5%	2	14.3%	2	8.0%	2	8.7%
その他	1	3.8%	0	0.0%	0	0.0%	2	8.7%
平均利用拠点数	5.0		3.5		1.5		1.2	

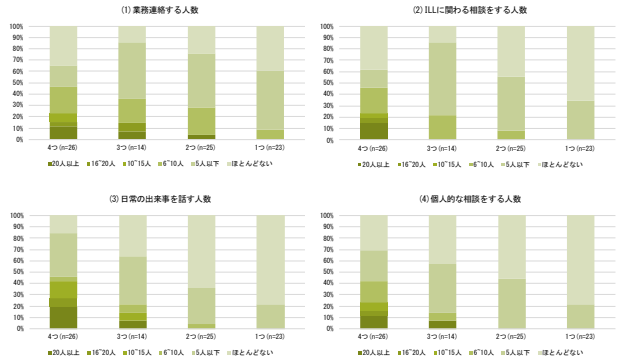
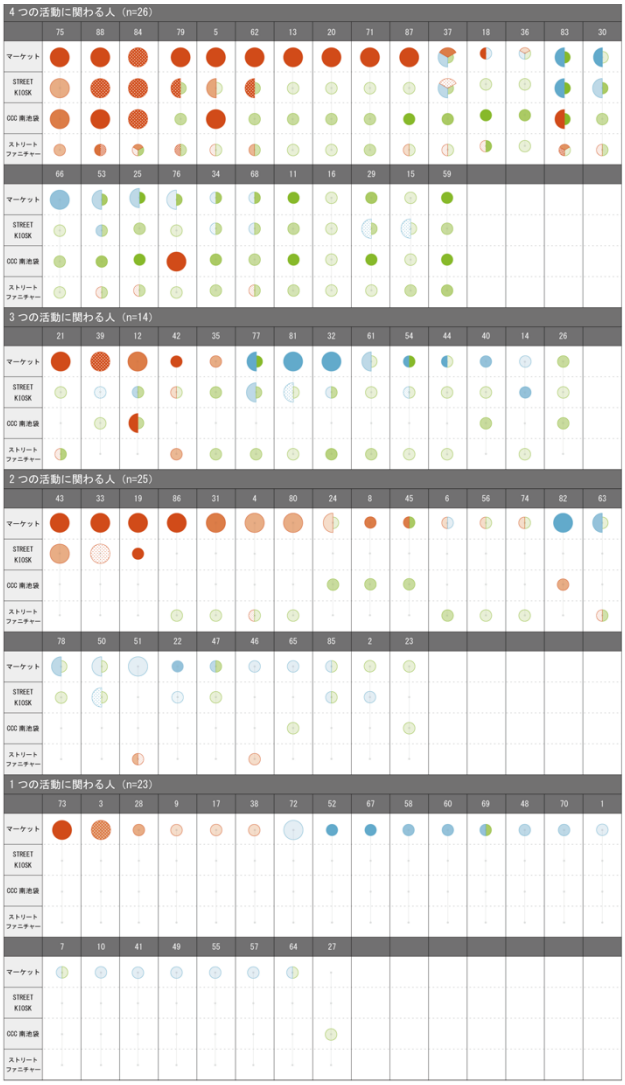


図 7：関わる活動の数ごとのやりとりの内容とその人数

6．結論　以上、対象事例の(1)事業と(2)人の関わり方を明らかにした。これより、日常に根ざした公共空間の利活用の実現には、事業の認知の向上に向けた定期的な活用の実施と、地域内連携を強化するための活用頻度の向上、活動に当事者意識を持つ参加者を増やすための関わりしろの拡大、そして、行政と連携し規制緩和や空間整備を行うことで活用の幅を広げていくことが重要となり、これらを同時進行で段階的に進めていく必要があると考えられる。そして、これらが進められた先で、地域住民が活動に関わり続ける日常に根ざした活動にしていくためには、活動に関わる人々が、その目的や自身の生活に合わせた関わり方を選択できるような「関わりの柔軟性」と地域の人と交流する中で「役割が先行しない個人としての関わりを持てる環境」が重要であり、公共空間の利活用が地域に根付くことは、活動内だけでなく地域全体としてのつながりや信頼関係の構築に繋がっていく影響力があると考えられる。

また、日常に根ざした活用によって、長く関わり続ける意欲のある地域住民が獲得できることが明らかとなった一方で、対象とした事業の継続にはその地域住民の有無に依存していることからまだ不確実性も強いこともわかった。地域の賑わい創出に貢献しながら、より持続可能性の高い公共空間活用手法については、今後も引き続き検討が必要であると考えられる。

表 5：個人単位の各活動への関わり一覧



注記

注１）事業主体・ボランティア運営キャスト・出店者・CCC 参加者のいずれかに当てはまる者とした

注２）4 章で関わりのあった拠点を中心に挙げ、複数選択可とした。

参考文献

1）大森 聡/藤井 さやか(2024)「住宅建替えと一体的に再整備された街区公園の維持管理活動を通じたコミュニティ形成に関する研究―茨城県つくば市竹園西広場公園のボランティア活動を対象として」都市計画論文集 59 巻 3 号 p.714-721。

2）生田 尚志/堀越 まい/佐藤 将之(2024)「Park-PFI 事業者と連携した地域住民が用意する参画の機会を通した「仮設的な場」の形成」日本建築学会計画系論文集 89 巻 819 号 p. 884-895

3）吉村 輝彦(2018)「公共的空間の日常に根ざした利活用による地域づくりの推進 ～東海市太田川駅前広場における「まちなかピクニック」の実験的な取り組みから～」日本福祉大学経済論集 57 23-58, 2018-09-30 日本福祉大学経済学会

4）「令和 5 年度グリーン大通り等における賑わい創出プロジェクト実施業務報告書」pp.1

5）豊島区都市整備部都市計画課,「グリーン大通り等における賑わい創出プロジェクト実施業務委託プロポーザル募集要項」,pp.2